

---

# ハイスクールD×D 神ノ道化を継ぐ者

キラ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ハイスクールD×D 神ノ道化を継ぐ者

### 【Nコード】

N3782BA

### 【作者名】

キラー

### 【あらすじ】

とある事情で死んでしまった少年は兵藤一誠に憑依してしまった。そしてイッセーは生まれながらに持った力を隠しながら17年間過ごしてきたが、

## 第0夜：プロローグ（前書き）

初めましての人は初めまして、ご存知の方はお久しぶり、キラース。  
す。

またお前か……って思う人たちも大勢いるでしょうが、暖かい目で見守ってくれると嬉しいです。

今回は現在アニメが放送中の「ハイスクールD×D」の小説にトライしました。あ、言っておきますけどISや遊戯王の小説も続けますよ。

## 第0夜：プロローグ

俺の名前は兵藤一誠。周りからは「イツセー」と呼ばれている。

私立駒王学園に通う高校2年生で、左腕がちよつと以上で人並みにエロいだけのしがない人間ですね。ちなみに左手には白い革製の手袋をつけている。

最近は朝に弱いことが弱点だ。容姿は特に目立ったものじゃないけど……髪の毛は白髪だ。一応アルビノなんだけど、身体は弱くないし、視力も普通だ。父親には「ご先祖様も白髪だったから遺伝じゃないか？」とも言われている。

あ、あと右目が銀灰色で左目が赤のオッドアイでもある。これも遺伝らしい。何でもご先祖様は左目に呪いを受けていてそれが色濃くなって受け継がれたんじゃないのか、と言われている。

さて、僕には2つ秘密がある。1つは……俺は転生者だということ。信じられないかもしれないが、本当のことだ。前世でもしい高校生だったけどテンプレのごとく事故死してこの世界に転生した。もう1つの秘密は……おっと、教室に着いたな。

机に鞆を置いてイスに座ると、俺の机に2人の特徴的な男子がやってきた。

「あ、おはようございます、松田」

「うっすイツセー。それよりさ、新作のエロDVDが偶然手に入っただけだよ、今度見る？」

「あー……都合が良かったらいいですか？」

俺に話しかけてきたのは野球少年のように髪を丸刈りにした容姿だけは典型的なスポーツ少年、松田だ。駒王学園に入る以前の悪友だ。

ただ、欠点が1つある。それは日常で普通に卑猥な言葉を口にしないで、性欲を常に曝け出しているド変態だ。俺も人並みには性欲はあるけど、松田のような感じにはなりたくないですね。あまり変な目で見られるとおかしな噂が流れるだろうし。

ちなみに松田は写真部だ。昔は野球部に入っていてエースだったみたいだけど。写真部に入った理由は確か、「女子のパンツを拝めるから！」というくだらない理由だった。

「お前やっぱ枯れてる？ それよりも、今日は強風のお陰でパンツヲ拝めたぜ……」

こっちはクールな台詞で卑猥な言葉を普通に口にかけているメガネをかけた変態2号、元浜。こっちもエロいことにしか目がない悪友2号だ。

すると松田がさつき話していたDVDを鞆から取り出す。……あれ、DVDって学校に持ってきたらダメなんじゃ……？

「うわ、またあの2人だよ」

「マジ変態」

「あれに巻き込まれてる兵藤くんはかわいそうだけど……」

ほら、女子が引いてるじゃん。あと最後の人、ありがとございませす。

「やっぱりお前枯れてるんじゃない？ こんなお宝目にしても何にも言わないなんて」

「いいじゃないですか、興味ないですし」

「え？ マジ？」

「はい、マジです」

2人は「どうしてだー!?」と叫ぶ。教室内ですから少しボリューム下げてくださいよ。

と、元浜が何か思い立ったのか、俺に話しかけてくる。

「そっぴやお前、俺には彼女がいました的な妄想話してたよな。その影響か？ 夕麻ちゃんって名前だっけ？」

「妄想じゃありませんよ。……でも、本当に俺以外は覚えてないんですね」

「前にも言ったけど、俺も元浜も夕麻ちゃんなんて子は紹介されてないぜ」

「そう、ですか……」

やっぱり、夢なのかな……。

その夢は俺に一目ぼれしたらしい他校の生徒、天野夕麻ちゃんが俺に告白してきて俺はそれを承諾、園子と恋人になったという内容だ。その後松田と元浜に夕麻ちゃんを紹介して2人がかなり俺のことを非難してきたっけ。

で、数日後の日曜にデートの約束をしてその日はたくさん遊んで、仕舞いには噴水のある公園で夕麻ちゃんに黒い羽が生えて俺の腹に光で構成された槍を刺して、俺が殺されるという夢。

その夢では殺される直前、俺は左腕を異形のものに<sup>コソバート</sup>転換して必死に応戦したっけ。

「とにかく見るだけ見るよ。そうすりゃお前も俺たちみたいになるって。なあ松田」

「おっよ」

いや、それだけはいやだな……。

そんなことを思っていると、松田と元浜が窓を覗いている。大方登校している女子でも見てるんだらうな……。

「何見てるんですか2人とも？」  
「もちろん女子に決まってるだろ！ イッセーも見ようぜ！」  
「俺はいいですよ……って押さないでください2人とも！」  
「いいではないかいではないか」

なんかおかしくなってるぞこの2人……。

で、窓側に押された俺は仕方なく窓を覗く。視界にはもちろん登校している女子や数少ない男子が見えた。その中には隣のクラスに所属していてイケメンで俺の友達の木場祐斗もいた。相変わらず女子に囲まれているな。……ちよつと羨ましいかも。

と、そのとき、視界に紅に染まった髪が映る。そう、どんな紅色よりも紅い髪、ワインレッドよりも濃いんじゃないかと思うくらい引き寄せられる。

うちの学校で紅い髪の人物なんて1人しかいない。

3年のリアス・グレモリー先輩。

成績優秀で全生徒の模範になっている美人の先輩だ。確か北欧の出身だつて松田に聞いたことがある。

「お、リアス先輩じゃん！」

「いつ見ても可愛いな」

「だよな」元浜。イッセーもそう思うだろ？」

そうだね、と適当に返そうと思ったところで、俺に異変が起きた。偶然リアス先輩と目が合ったときに心臓が激しく、ドクン、と疼いた。1回だけだったからよかつたけど……。

「おいイッセー、スゲエ汗だぜ。大丈夫か？」

「あ、うん……大丈夫。今朝見た変な夢を思い出してただけだから」

「そっか。けど無理はするなよ」

「ちゃんと保健室で見てもらえよ」

「……2人とも、ありがとう」

この2人が真面目なこと言うの始めて聞いたよ！！ 本当に2人とも俺のこと心配しているみたいだし、ありがとうございませう！

下校して松田、元浜の2人と別れた俺は家の近くにある公園でブラブラしていた。家に帰りたいつてわけじゃないけどなんか……俺の身体がおかしい気がする。

そんなことを考えていると誰かがこちらに来る。気づいたのは足音が聞こえたからだ。

「どうかしましたか？」

「あ、いえ、なんでもないです」

「そうですか」

俺に話しかけてきたのは20代前半の女性だった。胸は多分Eカップで顔も美人だ。……おっと、ダメだダメだ。あの2人みたいにはあまりなりたくないしね。

「それで俺に何か用ですか？」

俺が女性に質問したのと同時に女性の雰囲気が変わる。そして、俺の左目も何かに警戒するように言っているのか、うごめく。

質問の内容を答えようと女性は口を開く。



「あなたを始末しに来ました、兵藤一誠」  
「……ッ!?」

一瞬だった。

目の前の女性が突然右手に光で構成された槍を生み出してこちらに投げってくる。警戒して正解だったのか、俺は左腕で光の槍を防ぐ。

「……な、なんですか、その左腕は!？」

「あ、これですか? 『神の結晶』と呼ばれたものが左腕に擬態したものですよ」

そう言っただけ俺は光の槍によって破れた手袋を外す。

露出したのは、漆黒の十字架が埋め込まれた赤黒い左腕。それは血のような色をしていて、明らかに人の肉体ではない。

俺は左腕に意識を集中する。そしてすぐに左腕は異形のものへと転換した。  
コンバート

左腕は大型の銀色の鉤爪に変化して、手の甲に値する部分には黒い十字架の刺青が施されている。

これが俺の『神の結晶』、イノセンス俺の思いに応じて発動に似た状態となった十字架。  
クロス

「あなた、もしかしてエクソシスト……!？」

「そうです。……こんばんは、墮落した天使さん」

俺がそう答えると顔を歪めて漆黒の翼を発生させて羽ばたかせる。

「逃がさない」!

「ひっ!? ……きゃっ!」

俺は伸ばせるだけ左腕を伸ばして墮天使を拘束して地面に叩きつける。

そして俺は十字架クロスを振りかざす　　！

「哀れな意志に、魂の救済を！　十字架クロスノ墓グレイヴ！！」

鋭い十字架が墮天使を覆い、切り裂く。

彼女の身体は細かい粒子となって消え去っていく。

「あなたも、好きで墮ちたわけじゃないんですよ……」

俺は墮天使が遺した漆黒の羽を地面から拾う。そこから、何故か彼女の気持ちを読み取れた。

好きでこんなに歪んだわけじゃない。

けど、甘い誘惑に逃れられなかった自分も悪かったの……。

……すみません、殺すことになってしまっただけ。まだ、生きていたかったでしょう。俺も本当は殺す気なんてなかった……こんなことを言っても言い訳にしかありませんが……。

「どうかあなたが、安らかに眠れますように……」

俺の名前は兵藤一誠。

19世紀末に存在した黒の教団の大元帥、アレン・ウォーカーの子孫で『神の結晶イノセンス』、神ノ道化クラウン・クラウンの適合者だ。そして、俺の物語はまだ始まったばかりだ。

## 第0夜：プロローグ（後書き）

最後のほうは少しおかしかったですね。

イッセーがイノセンスの力を使える、っていうことを表現したかったんですけどね……。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3782ba/>

---

ハイスクールD×D 神ノ道化を継ぐ者

2012年1月10日00時53分発行